

聖書：マタイ 22：15～22

説教題：神のものは神に

日時：2020年3月29日（朝拝）

エルサレムへの最後の旅をして来たイエス様は、神から遣わされたまことの王としてついにエルサレムに入城されました。そのイエス様にユダヤ人のリーダーである祭司長や長老たちが挑戦をして来ました。イエス様はその彼らに3つのたとえを話して、悔い改めに進むように、そうでないとどういうことになるかを警告されました。そのイエス様に続けて3つの挑戦を仕掛けた話をこれから読もうとしています。まず今日の箇所に記載されているのはパリサイ人たちの挑戦です。21章45節に「祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた」とありましたが、彼らはそのことに気づいて思い直すどころか、イエス様に罠を仕掛けよう、滅びに陥れようとして画策します。先に見たたとえの通りです。神が送られた最後の使者、一人子の御子を殺そうと企てます。

その方策はヘロデ党の者たちと組んで仕掛けるというものでした。本来パリサイ人とヘロデ党の人は一緒に活動しませんでした。パリサイ人はユダヤの律法に熱心な人たちでした。「熱心党」と呼ばれる過激な愛国主義者たちとは違いますが、異邦人ローマの支配を良く思っていない人たちで、イスラエルの再興を願う人たちです。一方のヘロデ党の人は、ローマ皇帝のもとでこの地方を治めているヘロデ家を支持する人々です。現状肯定派の人々です。ローマの支配を良しとする人々です。従ってパリサイ人たちとは仲が良くないはず。ところがその彼らが一緒になってイエス様に挑戦することになりました。それは今回の罠と関係します。この両者がいることが都合が良かったのです。

その罠とは皇帝カエサルへの納税問題について、それは律法にかなっているかどうかをイエス様に問うというものでした。これにどのように答えても問題が生じます。もしイエス様がローマに税を納めよ！と言ったら、どうなるでしょう。イエス様は一般民衆の支持を失うこととなります。多くのユダヤ人はカエサルへの納税を異邦人の支配者に屈服させられている屈辱的なしだと考えていました。イエス様はこの恥辱の状態から我々を解放してくださるメシヤではなかったのか。ローマの支配から解き放つ救い主ではなかったのか。なのに、これでは裏切り者だ。そのように人々から失望されることとなります。もはや民衆のヒーローではあり得なくなります。

一方、もしローマに税を納める必要はない！と言ったらどうでしょう。すると今度はローマへの反逆者として訴えることができます。パリサイ人たちはこちらの方を望んでいたようです。イエス様をどうやっても宗教的な観点からは訴えられそうにない。どうしても打ち勝てない。ならば、と政治的問題に訴えて葬り去ろうとしたのです。ローマは死刑執行の権限を持っています。そのローマにとって、この人は危険分子である。ローマの敵である。そのように訴えてローマの手によって罰を下そうと図った。そのためにはヘロデ党の人が一緒にいてくれると都合が良い。彼らがそのイエスの証言に立ち会ったら、訴えるための行動を起こしてくれるでしょう。これでイエス様は死んだも同然である。そのように考えたわけです。

このように、どのように考えても逃げ場はない質問のように思えました。そこでこの問いからイエス様が逃げることをしないようにするための前置きを彼らは付けます。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。」 こうしてへつらいつつ、はっきり答えるように仕向けます。「さあ、この答えにイエス or ノーで教えてください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか、かなっていないのでしょうか」と。

これに対して主は何とお答えになったのでしょうか。イエス様は彼らの悪意を見抜いて言われました。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち」と。これは敬虔な振りをしながら、その意図が偽善的であるということでしょう。真理を求めているかのような振りをしながら、考えているのは人に危害を加えること。イエス様はそんな彼らに「税として納めるお金を見せなさい」と言われます。その彼らが持って来たデナリ銀貨を手にして、「これはだれの肖像と銘ですか」と尋ねます。彼らは「カエサルのです」と答えます。そしてイエス様はこのように言われました。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい」と。

まずイエス様は「カエサルのものはカエサルに返しなさい」と言われました。これはそこにいた多くの人々にとって驚くべき答えだったのではないのでしょうか。先に触れたように、民衆の多くは皇帝への納税には不満を持っていて、イエス様はイスラエルの救い主として、きっとこのことに否定的な見解を出してくれるのでは？と期待していたで

しょう。しかしイエス様は誤解のしようのないほどにはっきりとカエサルに納税すべしとまず言われたのです。その際、イエス様はデナリ銀貨を持って来させました。そこにはカエサルの肖像が刻まれていました。彼らはこの制度に色々文句をつけていたかもしれませんが、それでもこの銀貨を使って必要なものを買ったり、売ったり、日常生活で用いていました。そうした経済生活ができるのはカエサルを頂点としたローマの支配が確立していたからです。彼らはその中に生きて、明らかに大きな恩恵を受けています。誰の世話にもならず、一人で生きているというなら話は別ですが、彼らはこの銀貨と、この銀貨によって保たれている社会及びその構造の中で支えられて生きています。そのことに感謝せず、ふさわしい礼を尽くさず、ただ文句ばかり言っているというのは明らかにおかしい。恩恵にあずかり、支えられている者として、返すべきものを返すこと、負っているものを返すことは当然なすべきこと、義務であるとイエス様は言われたのです。

これはただ人間的にローマ皇帝のお世話になっているからというだけのことではありません。イエス様がこのように言われたのは、他の箇所から分かりますように、立てられている権威に従うことは神の御心にかなうふさわしい在り方だからです。カエサルをはじめ為政者たちを立てておられるのは他ならぬ神ご自身であって、神がご自身の器として、その人々を用いておられるからです。ローマ人への手紙 13 章 1 節:「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」ここに存在しているすべての権威の背後には神がおられると言われています。その人がキリスト者である場合はという限定はありません。キリスト者であろうとなかろうと、その人は神によって立てられていること、その人がそこに立てられていることには神の御心があるとされています。個人個人の目から見て、その人について言いたいことは色々あるかもしれませんが。しかし支配者として立てられた人がどんな人であっても、それはいわゆるアナーキー、無政府状態よりはるかにましです。神はその支配者を通して、ローマ書 13 章の続く節に記されていますように、悪を抑制し、社会的善を促進しようとされています。そして秩序ある生活が保たれ、世界が收拾のつかない混乱状態にならないように導いておられます。ペテロの手紙第一 2 章 13~14 節:「人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。」ここにもこの世のすべての制度、あらゆる権威の背後に主がおられること、そして主は彼らを通して悪を抑制し、社会的

善が促進されるように導いておられることが言われています。テモテへの手紙第一 2 章 1~2 節：「王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」ですから私たちは税を納めることはもちろんのこと、その背後にはその人を立てておられる主ご自身がおられることを覚えて、積極的にその人々を敬い、その人々のために祈り、またその人々に従うべきことが命じられているのです。

さてイエス様の答えはこれですべてではありませんでした。「カエサルのはカエサルに」に続けて、こう言われました。「そして、神のものは神に返しなさい」。注目すべきは、イエス様はここでこうは表現されなかったことです。「カエサルのはカエサルに返しなさい。しかし神のものは神に返しなさい。」もしこのように表現したら、「カエサルのもの」と「神のもの」とは互いに対立、区別されるもののように聞こえます。さらには後に語られた言葉によって、先に語られた「カエサルのはカエサルに」という言葉が、ほとんど打ち消されたかのような、あるいは否定されたかのような言葉になってしまいます。しかしイエス様はそうは言われませんでした。イエス様は「カエサルのはカエサルに」という言葉と「神のものは神に」という言葉を「そして」という言葉で結ばれました。ここから分かることは、この両方が決して否定されていないということ。両方が肯定されているということ。あるいは両者は調和するものとして語られているということ。このニュアンスを正しく受け止める必要があるように思います。

ではこの両者の関係はどのような関係なのでしょう。言うまでもなく、この二つは同列に置かれるべきものではありません。「カエサルのもの」と「神のもの」は同じ平面上にあるものではありません。カエサルに与えられているのは地上的な統治です。しかもそれは外的な統治です。現生の国、地上の国に関することです。その外的秩序を保つことです。従ってそれは私たちのたましいの内部までは踏み込めない。私たちのたましいの救いには関係しない。そういう意味で限定的です。それに対して「神のもの」とはすべてを意味します。ローマ人への手紙 11 章 36 節に「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至る」とある通りです。あらゆるものが神のものです。ですから「神のもの」の方が「カエサルのもの」より、比較にならないほど大きいことは明らかです。従って「カエサルのはカエサルに返す」という生き方は、「神のものは神に返す」という、より大きなものの中に、その位置を持つということになります。これらは互いに対立するもののように考えられるべきではなく、「神のものは神に返す」とい

う、より勝る、より大きな根本原理の中で、それと調和するように、その原則に沿うように考えられる必要があるということです。

ですからもしこの二つが衝突するような事態が起きたら、私たちは使徒の働きの中でペテロやヨハネが言ったように、「人に従うより、神に従うべきです」と言わなければなりません。私たちは立てられた権威に従うようにと言われていますが、その権威は無制限ではないのです。神に従わない歩みまでして為政者に従うようにとは絶対に言われていません。かつて「カエサルのはカエサルに」とか、先に見たローマ書 13 章の「存在している権威はすべて神によって立てられている」という御言葉を引用して、無条件の服従を要求する人々もいたようです。我々に従うことは神に従うことであると。しかし上に立てられた人が神の代わりに人間を拝むように命じたり、あるいは御言葉に反することをを行うようにと命じるなら、私たちはそれに従えません。あくまで「神のものは神に返す」が、私たちにとってのすべてに勝る根本原理、第一原理です。

しかしこのことを主張するあまり、本末転倒にならないように私たちは注意しなければなりません。イエス様は今日の箇所、為政者への不服従を勧めたり、その権威を小さく考えたり、見下すように奨励していません。多くの方がカエサルに対してもっと否定的なことを言ってくれるだろうと思っている中、カエサルに税を納め、従うことは神に従う生活の中に十分な位置付けを持っているとイエス様は回答されました。罪を犯すように強いられるのでなければ正しく敬って義務を果たすべきこと、それは神に従う歩みに調和するものとして神が定めておられるあり方であるという御心を適切に受け止めたいと思います。

そして「神のものは神に返す」という生き方は、ただ為政者との関係だけの事柄ではありません。先ほど、為政者に関することは全体のごく一部のことだと申し上げましたように、この御言葉の適用はもっと広いものとして考えられなければなりません。「神のもの」とは「すべてのもの」であると先に申し上げました。その「すべてのもの」の中でも特に「神のもの」と言えるものは何でしょうか。デナリ銀貨にカエサルの肖像が刻印されて、それがカエサルのものであることを端的に示していたように、同じように神の姿が刻印されているもの。すべてのものは神が造られた作品として、神ご自身がそこに刻印されていると言えますが、中でも特別な意味で神が刻印されているのは、「神のかたち」に造られたと創世記で言われている私たち人間でありましょう。ですから私

たちを神に返すことが、何よりも「神のものを神に返す」ことにおいて一番に考えられるべきことではないでしょうか。私たちは、「神のもの」である自分自身を神にお返しする生き方をしているのでしょうか。私たちの「目」の使い方はどうでしょうか。また「口」の使い方はどうでしょうか。神に喜ばれる使い方をしているのでしょうか。その耳は、手は、足はどうでしょうか。また私たちに与えられている賜物や能力はどうでしょうか。また時間、お金、様々な機会、人間関係はどうでしょうか。私たちは「神のかたちに造られている」という意味で「神のもの」ですが、それに加えて御子キリストの十字架の犠牲を通して今や買い取られた者でもあります。その意味でも益々私たちの存在は私たちのものでなく、「神のもの」です。私たちはキリストの贖いのわざを通して買い取られた者として、真に「神のものを神に返す」という生き方に立ち戻るように導かれています。キリストの恵みに導かれて、神のかたちを益々回復させられて、「神のものを神に返す」という本来の生き方へ進んで行くこと、このことを大事な課題とすべきではないでしょうか。

以上。パリサイ人とヘロデ党の者たちは、「カエサルか、神か」と二者択一を迫りました。「神」を取るがゆえに「為政者」を捨てるという罠に陥れることを望んで質問しました。そんな彼らにイエス様は、「カエサルか、神か」の二者択一ではなく、「カエサルも、神も」と答えました。このイエス様の答えを私たちも心に留めたいと思います。時にこの御言葉の適用は現実世界ではそう簡単ではないと思います。緊張をはらむ言葉でもあると思います。しかしイエス様はこの言葉を、緊張をはらむ時代の真ただ中で語られたことを覚えたいと思います。私たちにとって最も大事なことは「神のものを神に返す」ことです。これは私たちの生き方全般に関わるものです。そしてその中に「カエサルのものをカエサルに返す」という生き方が定められていることを覚えて、御心に従ってこの道を進んで行けるように祈り、導かれてまいりたいと思います。